も、子どもたちが元気をなくしている、気力・活力をなくしている時というのは、先がよく見えない時、自分のやりたいことが見えない時だと思うのです。子どもたちのなかにぐっと入っていって、彼らを疎外している「文化」を、大人である我々が一枚一枚剥いでやりながら、子どもたちが希望の灯をともせるような教育というものを追求していっていただきたいと、最後にお願いして終わりたいとおもいます。

（しおみ　としゆき＝東京大学）

（注）この稿は、にいがた県民教育研究所第三回研究集会（八九・二・四）での記念講演を採録したものです。当初テープから再生したものは本誌の二二ページ分の分量でしたが、編集の都合上約三分の二の分量に縮めてまとめ、汐見先生の了解をいただきました。なおその際、先生から正誤と若干の加筆もしていただきました。

（編集部）

〔表紙のことば〕

明るい性格の子ら

那須　高明

担任として、生徒自身に自分の性格について長所短所を分析させます。八割以上が長所として、「明るい」「楽天的」「落ちこんでもすぐ立直る」「面白い」と自己紹介をします。これは生徒に限らず、新卒・新採用の教員に新聞部がインタビューして記事にする自己紹介欄にも、「オモシロマジメ人間」とか「明るい」とかの語が多いことに気づきます。

生徒どうしの会話を聞いていると、その言いまわしの面白さに吹き出してしまうことが度々です。また美術の授業での作品でも、グラフィックデザイン系のものは特に明るいさわやかな美しいものが多いようです。

しかし、その彼らが自画像に取りくむと、不思議なほど一様に暗くなります。大戦前夜のヨーロッパ絵画フォービズムのルオーやブラマンクに通ずるような重苦しい暗さに驚かされます。この暗さも彼らの真実なのだろうと思います。若いということは、この「明るい」と「暗い」の間隔が、大人のそれよりケタ違いに大きいということなのだろうと思います。

（なす　こうめい＝長岡大手高校）